

俳諧發句題葉集

雜

799-5

新

意

俳諧資料カード

年代

寛政十一卷中

編者
(筆者)

升久

書名

俳諧發句

備考

題葉集
雜

(下垣内 蔵)

俳諧世説句題多事不難之部

祝

丁江男豊雄を旅の客

りつ中記もくもりや松の男あり

秋老の女

杜あうりさけさよひしく梅の女

苗代よきましくまらしく人の老

子老まらしくまらしく



編



二柳

井眉

傑書

尾衣はく先衣はく一衣のくま表 可笛

取柄はくまのまを成むうへはく

まを成む

まを成むのま先や柄のまを成む 不二

まを成むのま先や柄のまを成む

まを成むのま先や柄のまを成む 升六

まを成むのま先や柄のまを成む

まを成むのま先や柄のまを成む 魯牛

まを成むのま先や柄のまを成む

まを成むのま先や柄のまを成む 升六

州計

六十の如く 三〇

まを成むのま先や柄のまを成む 二柳

まを成むのま先や柄のまを成む

まを成むのま先や柄のまを成む

不二菴七十の如く

まを成むのま先や柄のまを成む 美草

嘯風父七十の如く

まを成むのま先や柄のまを成む

遊草の如く稀かす

月又美にふ成操五を七級集

何れ一園校の如き

七多ちやし山拵くさうぬる畑

西木

農家あま八十れ老成をうして

米の秋拵くさう揚るそ羽うま

蓼太

武家宛る福田氏八十す

初りくや奥にる米の字又口

大江

拵加溝杭矢山を氏八十す

山田や心の子りやそりの八十激川

八旬の人よ信らうく信らうそそ

や一神す

乾繻よけそ此の沙汰いさかりり

騏道

何と承下案本のかえ

ちりひとらつ白紙のそら早れお

玄阿

幟をそそそ助一紙よ

紙よそそむそそそのり紙幟が

大江

自楽う男かあ紙の如き

ゆはりそそのをを冬をいほあは

升六

七月茶葉ト居のかえ

そこの小鍋くさうそそ行居るま

二柳

ト居自紙

あま月の影を涼し敷く

標良

福位の自炊

居直てつらやふふは菊空

麦光

不二草福位の巻

牡丹さく菴やふもふふん

冬裏

落葉自叙

紅葉とや富士山を判るし

琴路

遊戯う入道せり

心ゆくもさつこつりよは橋は美

牧山

伯又うらみの判紙城かきと

三

神祇

涼しくもなをや世老のな歌中

春坡

さき鬼の時を百こふり城をい

感傷のさあ女さくすけ時を

黄糸

九月秋の信長は遠宮

と羽の旭勢自は似たり御遷宮

白雄

日 佐樂

あうこはにちりてさう 秋は切

几董

城通の弁 二句

まゝ梅の月お新らん城通し
下るるをこれおめりゆらるる城通
重厚 勇女

混雑

まゝや波連の引くる山清の
鏡より中へ落るるありの天船山
田の面ぬく嵐やとくに青帯
舟、さるや笹のさるさるのさる善
月、さるやさるさるさるさる山
控のさるもさるさるさるの山
美水 象子
二柳 来之
幸彦 不二

釈教

四天王寺 三句

赤木能くたりし中鉢生の時
日 夜遊 二柳

ゆゑの迹や月おの瓦葺
六条の地おもてくはるる地
も石の山中より筆として
升六 亀の

我もとて新法傍の迹は梅の茶
一茶

そと舟御殿の控りて

隣の朝月ぬらむ控り下
牧山

常のつづく洞ろく女 人堂

標堂

ふつとふき法のとおりや時を

五麻

る部を堂の大法をいしうて

不乃終よる風名禁く信はれ

千呂

遊台嶺

於氷院くの梅さうりまて

去す

清涼寺にて

梅く牛を取きくを釈迦如來

几董

登るる山

つらぬきいもくまふとくをこれ

升六

若原山にて

山門をいれらる日本の茶摘方

女 桑合

寶塔寺にて

花のふく蘭を妙法蓮華花院とて

十六 百堂

多羽のこころにて

きく池いむをあや塚のきく

羅川

髪切山にて

うらそくの跡とつるを

若翁

笠山

伝とん悟くゆるのかさつら

日

新くしてこれ世に成るる深のうらむれは 拍由

鈴麻山まきまの園のあゝたゝま 橘仙

房を催れ以此功徳責念佛 アキ 仙陵

深院より花を散りて

新く又咲きしやに遊ばるる伽藍石 木朶

南無居士なる大根のあゝま 月川

菅笠もよいとあゝりて

南無わらうと仏令のうらむ月時子 羅城

仏のあゝとよまゝのうらむん

はぐりもとら成切し時

等しくて涼しむのうらむ月 ヒトナシ由 萩川

法然上人の徳をよみて

まきま佛月のほめたん程はゆひ 大江

仏ははぐりまらるるまきま

よれまきと海玉のほつりまき

夜をまきしりしうらむ世の

業のうらむ

十まきまのうらむまき月時をまき

百まきまのうらむまき提種

彼岸の改新かの中しりて喰む

常没常流轉

行空くもや世を恨懐は累る

并六

但受諸樂

何れもいも言ふ秋の味もあや

遠白

知白

何處有南北

掃もかゝるも何れ冬木立

二折

戀

見物恋

我恋を指さるをふく風も

青人

恋

深きまゝいふは恋あはれ

几董

時よりや川流のまゝかた

園更

契るを恋

程もや伽藍の自らの物なれ

几董

空念ひと思ふは恋のまゝ

月居

待恋

いゝをいふは恋のまゝ

几董

鶯のいふは恋のまゝ

文里

行きのまゝは恋のまゝ

定雅

行くはひてあらも裂きさり秋のまね 九ノ子

露井

眼待恋

まぬ人やとくふらつたの鐘牙る

旧園

眼恋

うは不木より心のまきある煙るま

若雄

うらふ人よは常物まきるはむゆ

乙因

うらまやる指はまこやれも煙る

尺艾

うら恋

まらきおちもたあうとふ部

千紙

まら秋や海女よふうまのうら 九ノ子

きま喬

後叙

我社のまぬ神さくは梅のま

大江

思恋

をのわかひま言のまらまらる日如

うれてま思ひけりすりぬ大井川 トモ

隆白

をの思ひほまらとて炭火如 舟三様

つら

相思恋

まら思ふもらまらとてまら 人止方

梧泉

恋恋

まらまらまらまらまらまらまら 八ノ恋

騏道

稿書よりしるしと恋と事なり

可然

偽恋

きこられたる改を入りし松焼や

几董

寒う心挑美人

味と垣根さきと人さのふさねぬ

蕪村

少年初

まきのや公義の下のう恋うらも

几董

青橋曲

名月やとまきつとて流かき也

恋妓童戯

忍びるるをけりたをたはぬ恋とおも

杞柳

題新町

短書を伝うの鼓うてりりり

斗六

雑恋

人の恋は嵐うくをさそふなり

長秋

麦秋やうに人祝く釣到り

松蔭

紅烟又をた自うまの娘とれ

青橋

秋の夜をそとて嫁入の小社植

幸彦

無常

つらつらつちりて流きて世のそとに

百明

聖志くぬきをくくく長きまじり

仏仙

嬌くくくやふの思きくはなれ

自来

まのちか世をくくくくこのあま

斗六

世をくくくく

管鳥

秋のをぬ人のまよえりくる

管鳥

古墳添新土

まよく人のまよくこれれは又怪け

儿董

船くくくく皆投けくくく月の

青蘿

辞世 二句

業宿や春の襟乃るまじり

蒙之

山本氏何くは城跡のまじり

杉林も終のたきくや槍のそ

喜舟

まじりくく人くはあひ出

唐のくくく月と目いなるまじ

大江

老ぶくく

鳥籠くくくくくくくくく

生る死大吾

二月の月や危くくくくくく

馬瓢

道路の倒生脚くくくくく

犯らんをきくして又らうし

夕のうらや故よひうらやれ塔水戸 緝馬

病よけしぬる度よらるお魚の

鳴らりりかたきまゑも六斤狂

なり

ふよとくく〜争言うとく金多し 逸人

自他共白骨

妙きししをえ〜通らり秋雨 志多隆

諸行無常是生滅法

秋のおや〜をいしとくはたはた

哀腸

唯聞愁歎声

うらうらうらあゝ〜と秋のそら 若子

おと又城〜なひらる落葉

を〜なひらる

慵懶のな〜いけやあめのかげ 若村

おと女を〜なひらる母

や〜らる

か〜らるやあゝ〜なれをさせぬ 升六

きあがりしるまひらふ

似てよしのよのさつめ目と伝する

大江

きりや 菴室工藤居士を悼

そとまてそとまて 向ひ只秋のま

蕪村悼

きりや 人ともれき美のあま

曉臺

ぬ川 身中りし

きりや 秋の葉もはるれ山あま

二柳

大魚成りまて

人をしりて哭しむもあのみり

几董

几董悼

世中はらへ 洞志と 家来の物

二柳

蝶々友法は 身中りし

きりや 總てら 山あま

升六

叔父前田 哀の悼

きりや ぬらふ 月もあま

大江

蝶々身中りし

きりや 染のま 秋のま

羅川

きりや 身中りし

帰しきりや 門の秋

扱夕

くさくさ生仏才かこころの

人多くも附子も終るゝ今然のあ

斗六

母のまに骨をまゝ順のしん

納まて

善程よのちかよまゝくく日

子銅の指先せしよ

きつねてもさすのさくぬ枯神

女
どめ

子銅の夫をさししまひて

情まて白紙をさるわ

まじりやの梅をかまじり

几董

懐 舊

後醍醐帝の序殿

百官のさくさく候まじり

蓼太

長仲公の塚の木の梢

灯をくくさて

清々然の涼風よてふ高か筆

重厚

泉岳寺懐古

るさくさく四十七士のまをく

几董

懐古

山風のうしろにさうしつゝの秋

五来

幻住菴より

木塚木のほくたけつてな木を

甫尺

遠山亭の石まじり骨其角

居士の一袖をこころて忌日哉

まつふれさるよ

一石の洞もま向やまの言

春坡

故芝村はう祥忌を真つふ

任化菴より送る

日菊の珠くさ神の氷り外

二柳

新

灰 雲

骨桶よな秋の雪を灰にひく

交風

及ぶとまゝさうさうさう一七

十六おやゝ熱うけ物る墓の鳥

南棠

龜友居士牌

なまゝの流く物さおの月や二七日

二柳

月 三

秋月のおりこももま水西かこ

鴉城

又七日

香のぬき梅のおりひや又七日

野方

七日

美保く牛肩の松皮を拾ひり

拾五

東文居土百六日

月よよれひりくは障の鳴こよ

升六

蕪村一周忌 三夕

おとろくぬ月日の珠敷や一向り

几董

嵐山

晴くくひくをぬりぬけ申命

渡三

梅く香らわつこくこもるはば

其成

懐るなと面忌

ちろくくせ若むとるく奉り

重厚

秋くひくくはのまのこくも

方廣

行りく大祥忌よ

とろくりの糸もらるは紙をあら

井眉

風祥七回

とひくく申せをらるはせり

二柳

海川

とやと歌のら猿とのよ時ゆり

大江

亡冊をその律をまうり

黄水

あまのこゝろの秋のてそよばかた

黄花

亡母十三回

短おやしあかのむくしのと日の影

升六

頑意上人十七回

とんきくしえんごころのあけき

作者系

淡々二十五回

あつた今もそよごむくしをれ梅

旧國

亡父

るあつたのやうにらむとそはの秋

几董

亡母

よのをそよばさらの秋とふりよる

其つ角三十三回

橘あきのとそよごめらりやちのあ

燕村

鬼貫六十四回

この屋中やちさうし世の中

あゝ新月やちさうし世の中

片あつしとそよごめらり

わろや月百の片あつし

二折

母のふ十回をそよごめらり

命つりてより

さくらんぼのたぎりて母吊ふらぶ

志雄

晋子七十回 二百

夕べのこゝろを思ひて傷つむりや

儿董

来山

たぐむりし名も今なきあちこち

性若石

松石面

岩や山のりこをりし先を啼

若翁

日成伊寺身り

経板やまもつたはの片しぬれ

性若石

山岩中氏た来石面

車わりをんころ月日のひうりうな

美未

西れり上人六百回 二百

山端やうらうらと家の為きんげ

月居

人そいは花をのいもてころみん

井六

とえ英僧却旧跡とらのくさ

のね来 くらみ千回

ねまゝとて菊のむりし城守ふる

大江

迷懐

老懐

四百

さくらんぼり又海くひそ秋のうれ

蕪村

美草やまうし世はの柳んてくさ
おもしろや目のよふ花時をきては
な月や我より際りくさを思ふ

病中

余ふんておの若せくさうりん

去何

天の空の峰山裂衣裏燃て

人氏ひ集勢ふ元とくりのねを

きくはうくやとくちかみ成片

よいさくまきくままきさき

二月や入日てりはくはる山

羅堵

大佛殿回縁の傍

稲妻あ甲ちとさや火のそらり候

瓦全

正月十三日比叟更まつらひて

蒼おし東風吹あまし一灰の中

文塘

自悔

そのお中我よを流るのよひは

儿董

混雑

正月や柱ひよひもさしはる

石お

おろしはをいづれむりの中梅は春

升六

おまつり陽を成るる位居り

純埜

新玉をくちくち切り搥り搥り エト 百部

森にやるとも秋のまゝのひとら リカサ 巨川

老初をききも切られ秋のう リカサ 几董

きりつらぬれぬもて秋の藤を リカサ 羅城

朝うやや リカサ 后葉

朝りや リカサ 俣者不知

後 リカサ 五明

贈 答

人々菴のふえ人とありん

まのや伯娘のともも リカサ 風律

た リカサ

ま リカサ

お リカサ

海 リカサ

後 リカサ 重厚

ヨ リカサ

ま リカサ 几董

十 リカサ

年 リカサ

又やちんぼの丹をうけりておん

二柳

門人ら香の文の影に成ゆをぬ

とてひぬ園を清く時風程を

減えて

御敵又懐きうけぬを畑おとよ

升六

甥の五芳うきふくよふくよふ

あふさく居るもさくさくぬ陸邦

社牛

誠の人なまじりめておきて

ちり山をさそそくもいんをよおと葉

魏道

一茶畑を久しくさ芳序よ留めて

茶いろくきさちくく一味のねんや

升六

楚川うきさくをさめくはら

けくさしけ給ふ今朝の鈴りか

志強

一斗井ふくじんをさるよふく

のき門に集うさるふくさく

とちれち

クヌの園をさくさくおんまじ

岳輅

こままのつりつりけそのあは

ぬきしけまおくのさく

まのまじりてさく

牡丹ゆくはる未はれを牡丹花

芙蓉

知己の山寺に藤扉あり

もつ秋をとりそれを待たえてを

紀鳳

あり山ちよ月らんとして登り

あふれ嵐こらしくありれを

はつしそ月をとりそれを

傍

〜

ふと〜して月もおのり寸程の風

杜由

棒お新荷の隠梅をさる〜

いりの本を〜をさる〜をさる〜

几董

若門人

ささ〜は我も知〜とよ秋夢

若門

時白切〜を〜を〜を〜

ささ〜を〜を〜を〜を〜

可文

回ふり〜層橋よ乃ありて

〜の〜の〜の〜の〜

升六

浄園宗家〜一橋あり自然

て破壊さる〜を〜を〜

〜を〜を〜を〜

ささ〜を〜を〜を〜

芳人春菴成行くをうらむる
帰りのまきまをかきり

秋のゆゆしく人まらまらとゆ

とあそびをて

章古

酒ひとつのもめもあう一葉の香

信ふの終り寺うそをて成

とあそびをて二柳菴よ

筆うそこの名辨はくくはる

まらまら橋の病床をま

とあそび

蕪村

笑へんうらまにほく橋のま

強いのこめをてなつ小唄り

あそびかまはるまの遊とて

いふそこのまらしむるん不にほ

とあそびをてあそびをて人よ

あそびをてあそびをてあそびをて

信ふのねをてあそびをて

冊のまらをて人よあそびをて

ねのまらあそびをてあそびをて

自樂

二柳

旧園

青田

三三別

竹溪法沙丹波へ下るよ

そらつ鴨も眠る鴨たりりふく法沙

蕪村

二柳の東行をささる

推の主人乃て居て居せよ桧笠

几董

門人きつ所り及室系帰るる

そらつ鴨も眠る鴨たりりふく法沙

二柳

美大坡東行

二句

揚沙の鶴よまきまきやしそこの旅

几董

ふく牡丹らんそやんてまきまき

南昌

美大井をささる

そらつ鴨も眠る鴨たりりふく法沙

美大

よらてそふのこひひく飛つ

てなつる車とあつ八丈孤き

ゆくさ

流人船とまよふ時とまよふ人

美大

信をささる

穉きれも祖沙のまきまき

柳也

柳也

火名の安も暮らたけ掛るこりぬ
學の生れ眼をささる

不とくさひふくしひ越よ歸る山

糸竹をささる

又こらうとむく日さるる赤らひい

ち月菴をささる

福をささるる赤中田を表はらぬ

凡十の帰園よ

をささるる陽てぬをのりらるる

近月の赤り城をささる

五麻

二柳

九十

廿六

秋風も吹きたるこりぬし秋歌

潭月の清く乃るる城ささる

中野の清く乃るる赤中田

一茶坊の縁をささるるむる 二白

中野の清く乃るる赤中田

藤の清く乃るる赤中田

赤中田の清く乃るる赤中田

藤の清く乃るる赤中田

騎石

爰士

標堂

黄葉

留別

うしはらひもあつてもまをれぬあや
らふ山や柳をきくさきののねしきま
き海への上舟の障のなみせ舟
唐草類くむもわらなうくねおほ
好園さつはくかたしむて
又てよまやや舟とさきの杖さう
なまの川ぬき流すく葉乾
のあをさししりしり人の
侍もねりひきま
跡さつらうらなをらぬ秋の風

蓼太

二柳

子洞

一茶

若翁

つはらひもあつてもまをれぬあや
らふ山や柳をきくさきののねしきま
き海への上舟の障のなみせ舟
唐草類くむもわらなうくねおほ
好園さつはくかたしむて
又てよまやや舟とさきの杖さう
なまの川ぬき流すく葉乾
のあをさししりしり人の
侍もねりひきま
跡さつらうらなをらぬ秋の風

峰友

素郎

升六

樗堂

田荷旅

かきつらきを出してさるや入

永日や大仏さつらつあききり
そつ傍りかきつらきよもあききり
うらふ旅さつらぬよあきのあきか
富士さんさつらあききりあききり
さふよあききりあききりあききり
さつらあききりあききりあききり
さつらあききりあききりあききり

石崇
兼多太
理牛
文砂
風和
樗堂
青川

旅さつらあききりあききりあききり
あききりあききりあききりあききり
あききりあききりあききりあききり
あききりあききりあききりあききり
あききりあききりあききりあききり
あききりあききりあききりあききり
あききりあききりあききりあききり

三千彦
里山
郭之
一茶
車厚

茶井
志々丸
飛川

天竺を逐鹿せむとせむ

海山や江巾の下のまじりのり

冬をさうりゆみののちをぬきさすよ由ぬ

なつとゆきと一様めしれまじりぬ

赤火燧をくくくくくくの本の猿をぬ

猿よまじりぬてさよのくくくくくく

秋のぬきまきをくくくくくくくく

猿をぬきまじりぬてさよのくくくく

くくくくくくくくくくくくくく

栢菴

恭曷

馮月

其叟

完而

士朗

香風

帶様

まじりぬてさよのくくくくくく

墨山

ぬきまの石面をぬきまじりぬ

まじりぬてさよのくくくくくく

まじりぬてさよのくくくくくく

まじりぬてさよのくくくくくく

完来

東夷山

まじりぬてさよのくくくくくく

重厚

名所

よ〜那山

さう

控せたるゆきの月や浪子の酒

二柳

ね 雪

二句

ねしき中まら雪の世をなまし

青阿

ね雪の清なる月のひらり

一草

まらぬも雪の中へ帯ちり

朱駒

隅田川

二句

秋風やも帯ぬりの隅田川

完来

うらさや秋の月を今隅田川

成羨

雪の初消るとえを筑波山

乙二

まらぬ雪のまらぬ雪の信濃山

貞松

掖

二句

掖や雪をなめる月のうらえ

去聲

曉鳥

掖やつぼは、小ふらりゆら

柏由

不破の月を関をわく入屋

方明

らさ月のゆとゆら秋の二え

香風

ら漕うゆら

雪のしらり雪のしらり雪のしらり

風律

雪掖山

雪のしらり雪のしらり雪のしらり

蓼太

掖雪を林うて

せいの音 示 其 川 人 の 所 じ 分 標 堂

位 の 如 也 ち ら う 歩 り てる 程 月 麦 光

後 仿 や ち も 意 志 々 々 陸 几 十

橋 々 々 や め ち ら 五 々 々 秋 の 言 石 蘭

井 生 鳴 々 々

人 ち ら の ま ち 々 々 々 々 秋 の 上 蝶 々

玉 の 浦 々 々

を ち ら 々 々 の 穂 人 々 々 々 々 秋 石 紫

存 ち ら 々 々 田 々 々 々 の ち ら 々 々 少 女

友 々 々 潘

詩 歌

後 々 々 々 々 々 々 々 々 々 潘 の 人 芦 角

出 羽 々 々 々 々 々

経 亦 々 々 々 々 々 々 々 々 々 山 麦 拳

春 眠 不 覺 曉

美 の 而 翹 々 々 々 々 々 々 々 几 董

拳 觴 白 眼 望 青 天

醉 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 人

春 水 滿 四 澤

らうれふと那くはや芥のニ葉生

几董

白雲深處老僧多

まの月仏法僧のまのしるま

蚊山

春風春水一時来

下府や濁の炭くく將井次

春坡

春宵一剋價千金

梅ひと木をうてくはふるをま

松足

江山春真多

雪をうしうに霜の毒くれ

六合

梅柳渡江春

水とひとつ傷をくふしをうと梅

升六

梅歴寒若發清香

梅う雪やをうまけうをうをう

文耕

洞水湛如益

朝の不中一輪ううに洞の色

蕪村

形影自相憐

鏡くの鏡とをうしうに朝の秋

几董

悲是五侯家

後門をうまう森ぬ旅の奥の骨

平生一行心

秋をしのぎて西よりそ松の風 其成

囊中自有銭

酒うらみかたむむ月の夜は 大江

不知明鏡裏

抜るゝとさるゝは異もや秋の善

霜鬢明朝又一年

みよきぬてのら月をを成りしえれ

少壯幾時奈老何

孫うらむる可うさるをさるゝを成り 瓦全

濯足萬里流

獨牛一たふ角ふるまひささけり 素脚

菊のね糸ふ風程りそよは

もさるなとをけさの風は

そよみささけり

そつゝゝてきぬらもぬりの六月花 兼伯

畫讚

芭蕉翁肖像

ちやん成てそつゝゝて月也無事や又

二拵

張良画

山崎やふるまのりつて世のかみ

二柳

遊女画

合点しては道迷く山は九段

李太白画

白也侍也海やらくあむま風を

列子画

列子よく風を御して風を

知る風よく列子を御して

て列子を知らぬ

風巾又向くを是も知らぬかき

宗祇画

そそぎの音きく癒なき梅の香

蓼々太

方西雲と鶯の画

きつろくのえり同をぬ山うつた

重厚

赤方殿山園江巾きつろり

柳を登る画

はきくやらののまぬはるるも

大江

らつめりの画

らつめりつこよ海ぬらるるん

各風擬しゆ画

圓角力きまもとくもれ出まうを

旧必

福祿夢画

名月も天宮もまらう一おまを

以文

伯虎月画

此もまらう一おまをまらう一おまを

二柳

每まらう一おまを

此もまらう一おまをまらう一おまを

燕村

及る画

まらう一おまをまらう一おまを

黄志

遊女画

おまをまらう一おまをまらう一おまを

盛堂のり画

まらう一おまをまらう一おまを

おまをまらう一おまをまらう一おまを

揚貴妃の画

おまをまらう一おまをまらう一おまを

子蓬

まらう一おまを

おまをまらう一おまをまらう一おまを

如水

破芭蕉画

如水

秋風のよきと秋のよきと

廿六

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

推四三

寛政十一庚申歳

心齋橋筋北久太郎町

河内屋喜兵衛

同唐物町

同 太助

同博労町

奈良屋長兵衛

同北久太郎町

塩屋忠兵衛

京都書林

菊屋太兵衛

